

真宗が説くところの阿弥陀仏とは、いったいどこにいますか。そう尋ねられたら、あなたはどうか答えられますか。

こういう問いに対して、いままでは二種の答えが教えられてきました。そのひとつは、阿弥陀仏とは私の生命の中に宿ってくださるという考え方と、もうひとつは、阿弥陀仏はいつも私の側(そば)に来てくださるという考え方です。前者は、まったく主體的に、私と仏とを一体的に捉える立場に立つ発想で、内在的な理解といえることができます。そして後者は、まったく対象的に、私と仏とを二元的に捉える立場に立つ発想で、外在的な理解といえます。そこで親鸞さまの教示により

仏はよじこえていますか
信楽峻磨

安楽寺寺報

聞光

第66号
涅槃会号
2013/2/15

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

この如来、微塵世界にみちみちたまへり。すなわち、一切群生海の心なり。(『唯信鈔文意』)

と明かされます。主客二元的、内在的な理解です。阿弥陀仏は、あらゆる世界にみちみちて、私の生命の中にまで来てくださるというわけです。

しかしながら、蓮如さまの教示によりますと、それは違っています。

この阿弥陀如来の御袖にひしとすがりまいらせよ。(『御文章』)

と語られます。それは主客二元的、外在的な理解です。阿弥陀仏とは、私の外なる存在だというわけです。



したがって、私たちが阿弥陀仏に出会う、それを信じるといえることは、親鸞さまの教えによるならば、その日々に念仏をもらしつつ、それがそのまま、阿弥陀仏の私への呼び声であると聞きながら、その私の生命の中の仏に、深く「めざめ」ていくことをいいます。しかもまた、そういう「めざめ体験」とは、私の生命にめざめることの中で生まれてくること、そこではつねに、私の生命の中に宿る我執、その罪業の深さに「めざめ」ることと、ひとつとなつて成りたつてくるものです。そのことは、親の恩がわかるということに重なるもので、親の恩が知れてくるということとは、私の親不孝が反省されてくること、ひとつとなつて知れてくるようなものです。

かくして、このように私の内なる仏に出会い、それに「めざめ」ということは、その必然として、この私が古い皮を脱ぎ捨てながら、新しい私に向って少しづつ成長していくこととなり、またつねに仏とともに

生きていくところ、私はいま現に仏に救われているという、確かな実感が生まれてきます。そしてまた、その信心の生き方に、厳しい自己責任性が生まれてきます。親鸞さまが、真宗信心に生きることは、「しるし」(証拠)を生きていくことであると教えられる理由です。

しかしながら、蓮如さまの教えによると、仏に出会うためには、ただいちに私の外なる仏、その大悲に向つて「たのみ」、それに「まかす」ことだといわれます。このように「たのみ」とか「まかす」といふことは、こちらから相手に向つて、一方的に依頼するだけであつて、そこでは仏に救われたという確かな実感が生まれることはなく、また人格成長ということも成りたつはずはありません。

いま私たちが、真宗の教えを学ぶにあたっては、どちらの教えにしたがうのか、よくよく思量して、まことの信心を身にうることが肝要です。決して道をあやまらぬようにしてください。

(二〇一三・二・一)

安楽寺マンガ通信

その18 信楽めくひ作

今回も時間についてお話しします。

普段、おまじに気分が悪いと思ってますが、私たちの生活は時間のおかげで成り立っています。

おまじの法要も

バスの時間

病院の子約

私たちの行動は、常に時間の流れの中にあります。

「時は金なり」といいますが、お金と同じように価値があります。

無駄にしないように、大切に使う必要があります。

私たちの人生は時間によって決まっています。その時間をどう使うかが、私たちの未来を左右します。

私の大学一回生の時も終わりに近づいてきました。一年の有意義に過ごせたか、振り返って思い出すことがあります。

ミットヨ祖先祭

昨年、の仏教伝道協会の研修会で志和浄蓮寺のご住職とご縁がつき、(株)ミットヨの祖先祭に招かれてお話をさせていただきました。安浦・広・郷原・志和と4カ所の工場をまわり、従業員の方々にお話をさせていただきました。最後が志和の工場でしたが、ちょうど浄蓮寺様の横に工場があり、200名以上の従業員が献花献灯献香をして、大変厳かにお勤めがなされました。その表白文(ミットヨでは祭文といわれています)には創業者の思いが込められており、常にミットヨの従業員は仏法を中心に心を育て続ける従業員であって欲しいという思いが述べられます。その願いを元に会社を挙げて毎月開催されているようです。就業時間中にそうした法要を持つと言うことは、経営者の志も半端ではないことをひしひしと感じました。つつい日々業務に追われて、何を後回しにしているのか。恥じ入るばかりでした。広大な敷地に寺と工場があり、寺の左山頂には親鸞聖人像があり、とてものもどかで、いい所でした。



安楽寺法要案内

三月	彼岸会	日時 3月16日(土)朝・昼 講師 長浜 住蓮寺 豊原俊徳師 講題 「浄土真宗のみ教え」
四月	花まつり	日時 4月13日(土)朝・昼 講師 海岸 西岸寺 長岡正信師 講題 「迷信」
五月	降誕会	日時 5月11日(土)朝・昼 講師 畑賀 品秀寺 柳父正道師 講題 「仏さまと私」
六月	永代経	日時 6月15日(土)・16日(日) 両日とも朝席・昼席 講師 大阪 西光寺 天岸浄圓師 講題 「往生ということ」

※訂正 4月花まつり法要の講題は「迷信」です。訂正お願いいたします。又、8月歓喜会の曜日が間違っております。これも火・水に訂正お願いします。申し訳ございません。

聞心 体罰 信楽晃仁

大阪桜宮高校バスケット部の主将が顧問の先生の体罰を苦にして自殺したことを皮切りに、各方面での、指導者の体罰が問題となっ

ています。またその後柔道女子日本代表の選手十五名が監督の暴力を告発したことも、大問題となりました。選手も

もうどうにもならなるところまできていたようで「指導の名の下に、または指導とはほど遠い形で、暴力やハラスメントで心身ともに深く傷

つきました。人としての誇りを汚されたことに対し涙し、疲れ果て」た。という訴えをもとに、連日テレビや新聞はこの問題を取り上げ、指導者の辞任が相次ぎました。

「浄土は言葉の要らぬ世界である。人間の世界は言葉の必要な世界である。地獄は言葉の通じない世界である。」とは曾我量深先生というお東の学者さんの言葉です。

仏さまの世界は「以心伝心」言葉を介さずとも心が通じあうといわれます。そして人間は言葉の世界。私

たちはどんなに仲良くなっても、愛し合っても、やはり心はわかりません。何を考えているかわからないのが人間です。だからこそ言葉で繋がらなくてはならないのです。そして言葉の通じない世界、それが地獄です。幼稚園で子どもたちが喧嘩にな

ります。最初はなんやかやと言いつつ喧嘩していますが、言葉がつかるとき、地獄があらわれます。かみつきたり、かぐつたり、叩いたり。それが地獄の始まりです。人間の世界は言葉で決着をつけます。戦争も、テロも、殺人事件も言葉が通じなくな

った世界です。そこが地獄です。自殺した高校生も地獄なら、体罰を与える教師も地獄です。なぜ言葉にできなかったか、なぜ言葉で伝えられなかったか、それは当人だけの問題ではなく、周りの私たちの問題でもあります。

月に一度の本堂での仏参の折り、子どもたちに「イジメって知ってる？」と聞きました。するとすかさず三歳のもも組の男の子が、本堂左の十界図を指さすんです。地獄の鬼は罪人をイジメています。地獄は究極のイジ

めでもあります。月一度の本堂での仏参の折り、子どもたちに「イジメって知ってる？」と聞きました。するとすかさず三歳のもも組の男の子が、本堂左の十界図を指さすんです。地獄の鬼は罪人をイジメています。地獄は究極のイジ

めでもあります。月一度の本堂での仏参の折り、子どもたちに「イジメって知ってる？」と聞きました。するとすかさず三歳のもも組の男の子が、本堂左の十界図を指さすんです。地獄の鬼は罪人をイジメています。地獄は究極のイジ

めでもあります。月一度の本堂での仏参の折り、子どもたちに「イジメって知ってる？」と聞きました。するとすかさず三歳のもも組の男の子が、本堂左の十界図を指さすんです。地獄の鬼は罪人をイジメています。地獄は究極のイジ



メの世界であり、体罰の世界です。

この世にはそのイジメや体罰が少なくとも二千六百年は続いてきました。なぜならお経に出ているんですから、すでにその時にはあったということ。お経は昔のことではなく、今のことです。先日、幼稚園の年長さん達が、地獄絵本を見たりして、ゆき組版、十界図を見たりして、ゆき組版、地獄極楽絵図を書いてくれました。仏さまの絵本や、紙芝居も見て、心の中でイメージを膨らませ、みんな得手分けして作成にかかり、すばらしい作品ができました。できあがった作品は縦3m強、横1m強の超大作となりました。飾るところがなく、思案の末、階段の踊り場に展示する事にしました。三月終わりまで展示しています。実物を是非一度見てやって下さい。

さて、話を体罰に戻しますが、教育の場には体罰という言葉自体が似合いません。なぜなら学校や教室で体罰というならば、学ぶものが何かから罰を受けなければならぬのか、疑問です。罰とは広辞苑に「罪またはあやまちのある者に科する懲らしめ。しおき」とあります。今回の女子柔道もなんの罪があり、なんの過ちがあったのでしょうか。そしてなぜ懲らしめられ、仕置きされなくてはならないのでしょうか。

実は問題は私たちの中にあります。体罰の元となる、力で人を思うように動かそうと言う心があることです。これが問題です。それは腕力だけではなく、財力であったり、権力であったり、時には学力もそうしたものに使われかねません。そうした私たちの根底にある力信仰とも言える思考回路で世の中がまわっているのですから、自分の持った力で他を動かすことが、本当のところおかしいとは思えないのです。特に指導者というのはついそうした世界に浸かってしまします。よくよく用心が必要ですが、それがここでは体罰という形で現れ

ているだけだと思おうのです。

仏教が説く通り、ずっと私たちの社会の中にはイジメ、体罰といった地獄が存在し続けてきました。でなければ、阿弥陀如来の本願の第一（無三悪趣の願）に、「私はとにかく地獄のない世界を作りたい」という切なる願いは出てこないのではないかと思おうのです。

この度北朝鮮が三度目の核実験を行いました。「力があれば、他国を思い通りにできる。」だけれどもがそう思うのです。アメリカであろうと、中国であろうと同じです。憲法九条を変えて、軍隊を持つようにするというのも、力を持つようとするのです。凡夫は皆同じ思考回路で生きています。今後悪者の北朝鮮への対応は「制裁」だと言われます。制裁とは懲らしめであり、仕置きという罰です。力のない者が、力のあるものに制裁を加えることはできません。その力は財力によった経済制裁か、武力によった制裁か。「やられ



たらやつちやれ」で私たちは育てられ、育ててきたのですその思考回路から抜け出ることがなかなかできません。どのみちこの地獄の世界に至る所で今後も現れてきます。その私たちに必要なのが、仏教の視点であり、親鸞さまの教えです。お釈迦さまは「怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。」と言われました。親鸞聖人は「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ。如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」と言われました。これを聞いて納得できるでしょうか。私の考えているようなことは地獄の種ばかりです。だからこそ、私たちは地獄を超えた如来の智慧に立ち返ることが必要なのです。

仏事のイロハ

お経を上げるのは僧侶の役目？

お勤めの作法①

月忌参りなどで門徒さんの家を訪れてお勤めする時、しばしば寂しい思いをすることがあります。それはせつかくお参りしているにもかかわらず、家の人がだれもそばにいないで、一人で勤行している時です。家の人は、と言うと、別の部屋でなにやら用事をしていたり、お勤めが終わってから出すお茶の用意をしていたり・・・といった調子です。



に加わっていたら、その後のお話もお聞きいただきたいのです。さらに、僧侶がいなくても、日頃からお経に親しみ、お勤めができるようになって下さればと思います。

お経は確かに難しい漢字が多く、意味を理解するのは容易ではないでしょうが、繰り返してあげていると、自然にスラスラ言えるようになります。経文の仏教語にも興味が出てくるものです。

次回引き続き、日常の勤行と、その作法について述べてみたいと思います。